

の穴へ入、はなのへだてへ親指の頭をあて、是を定規とすべし、矢をはげ膝の上にて一はいに引つめ、すこし間をあらせて、打上て毘ふべし、的をねらふにいろくあれども、的の上ぶち下ぶちなどねらふはあしき事也、的と棚の横木との間にねらひをさだむべし、いづかたをねらふとさだめずして、空なるところをねらふといふ事、是大事のならひ也、總じて早氣は弓の病にして、早氣の分はみな中らず、もしあたるともまぐりあたり也、隨分たもちてよくねらひ、矢つぼさだまりたる時、押手と付と張合せて放す時は、あたらずといふ事なし、一度に矢四本あり、一の矢射るに、残りいまだ三本あるとのたのみにて、倉末の心あり、一矢一矢を大切に射るべし、右大概のをしへ也、くはしき事は書面にゑるしが、たし、口授ならではつたへがたし、よく工夫あるべし。

〔楊弓射禮蓬矢抄〕凡射場者、以七間間半ナカ爲定數、漢家本朝之流例也。

凡切穴者、於中人懸十錢、朝廷之於宸宴者、以於洲賀カ五爲賭、雖入穴令抽者爲一矢、

〔楊弓射禮蓬矢抄追考〕道具の事

一、錐穴、あてたる人に括くわを渡す、もし穴に入といふ共、抽るときは一ツあたりになる也、射抽は各別也。

〔雍州府志土産〕楊弓○中 凡矢二本稱一手、二百本謂百手○中 凡射者座、去棚七間半也。

〔和漢三才圖會嬉戲〕楊弓○中

棚與席相去七間半、每以五矢決勝負、二百矢謂百手、百手内五十矢以上中的者爲朱書、百矢以上爲泥書、百五十以上爲金書、百手悉中者爲皆矢、最希有也。

〔薩戒記〕應永卅三年三月六日庚子、晚未向中御門宰相亭、有楊弓興、入夜歸家、

〔親長卿記〕文明十二年七月七日、今日有七種事、